

# 氏寺の中世的展開

——『建内記』にみる浄蓮華院の役割を通して——

相川 浩昭

## 目次

はじめに

一、万里小路家と浄蓮華院

(一) 万里小路家と万里小路時房について

(二) 浄蓮華院について

二、浄蓮華院と万里小路家々領経営

(一) 請負代官の選定

(二) 京と家領間の中継

(三) 家領の代官職請負

おわりに

## はじめに

「氏寺」という語は、ある寺院を建立、もしくは特別に保護している檀那との関係を、端的にあらわす場合によく使われる。「某寺は、某氏の『氏寺』であった」と使われることが多いだろう。例えば「興福寺は、藤原氏の『氏寺』であった」などである。

「氏寺」は、飛鳥時代の豪族達が建立した私寺が、特定の「氏」による私寺であったことから、「氏の寺」即ち「氏寺」となったようだ。国史大辞典等の「氏寺(うちでら・うじでら)」の項目をみても、実例の最も古いものを、飛鳥の豪族建立の私寺としており、「氏

寺」の定義のベースとなっていると考えられる<sup>(1)</sup>。つまり「氏寺」は、特定の氏によって建立され、建立者及びその氏族の加護を祈り、祖先の供養や祭祀、仏事等を行う役割を持つ私寺であることが、基本的な定義となり、「氏寺」の語は、そのまま中世の同様のケースにもあてはめて使用されることも多い。

しかし、中世になると、古代における「氏」社会から「家」社会の成立がみられるようになる<sup>(2)</sup>。意地悪く言えば、ある「家」が建立した私寺は、「氏寺」ではなく、「家寺」と呼ぶべきではないか。また、既存の寺院に対して新たに檀那となり、自らの氏寺とするような例もある。古代の氏寺の定義やイメージは、中世においてはズレを生ずる場合があるように思える<sup>(3)</sup>。

もし中世でも「氏寺」という語を使うことが許されるならば、中世の氏寺は、古代のそれと比べ、より多様で複雑な性格や役割を持っていたことに、十分注意しなくてはならないだろう。古代において生まれた「氏寺」は、中世において大きく変化していったのである。

では、具体的には中世の氏寺はどのような性格や役

割を持っていたのだろうか。本論では、室町時代の万里小路家と、その氏寺の一つであった浄蓮華院の關係を取り上げ、同院の性格や役割を明らかにしてみよう<sup>(4)</sup>。

史料としては、万里小路時房（一三九四―一四五七）の日記である『建内記』（『大日本古記録』所収）を主に扱う。『建内記』は当時の政治、社会、経済、宮中行事についてはもちろん、家領経営や仏事、祖先供養などの家政や信仰に関する記事等、豊富な内容をもつ日記として知られる。この中に、同家と氏寺の關係を示す記事も多くみられる。

本文中、特に注記のない引用史料は『建内記』である。

## 一、万里小路家と浄蓮華院

### （一）万里小路家と万里小路時房について

『建内記』の記主、万里小路時房は万里小路家の当主であり、同家は勧修寺流藤原氏の流れをくむ家である。

勧修寺流藤原氏は、藤原北家の冬嗣の孫、高藤（八

三八・九〇〇）を始祖とする。高藤の娘、胤子が、宇多天皇の女御となり、敦仁親王を生んだ。のちの醍醐天皇である。高藤は天皇の外祖父として一気に昇進し、一族は大きく勢力を伸ばした。

醍醐天皇は、母の胤子の死後、昌泰三年（九〇〇）に追善のため伽藍を建立した。これが勸修寺である。高藤の子、定方がこの境内に西堂を建立してよりは、一族の氏寺として密接な関係を築いていった。のちに一族は「勸修寺一流」、「勸修寺流」と呼ばれるようになった。

この一族は、多くが文書作成の作法や知識に秀で、弁官・蔵人の職に就き、実務官僚として活躍したことが、大きな特徴である。平安時代後期、為隆以降になると弁官・蔵人の家職化が進んだ<sup>5)</sup>。

同一族は、院政期から分家が多く派生した。南北朝期までには、本家というべき勸修寺家を筆頭に、坊城家、中御門家、甘露寺家、清閑寺家、葉室家、万里小路家などの家が成立した。なお、「勸修寺家」という家名を正式に称したのは、勸修寺経顯（一二九八―一三七三）からである。

万里小路家は、資通から本流と別れ、宣房が「万里小路家」を称したことに<sup>6)</sup>はじまる。同家は、勸修寺流藤原氏の家職でもある弁官・蔵人を経て、最高で大納言に至る家柄で、一般に「名家」と分類される中流貴族である。

しかし、時房の父、嗣房は准大臣、時房になると内大臣にまで昇る。また、勸修寺流全体の代表者である「氏長者」も任されていた。つまり家柄以上の地位にあったのである。これは、嗣房や時房が、足利將軍家の家司として奉公し、武家の後ろ盾があったこと<sup>7)</sup>や、南都伝奏や武家伝奏<sup>8)</sup>を歴任した実績の反映であると考えられる。時房は、文書作成の作法や知識はもちろんのこと、朝廷行事にも通じ、博学であり、公武に顔の利く人物であった。一族の内外で重宝された公家であつたのである。

時房が家柄を超えた地位を得る一方で、同家の家政は厳しいものであつた。

家政の中で、家領経営は特別重要である。家領から上がつてくる年貢収入は、家政を支えるのに必要不可欠であつたからである。

だが、当時は、地頭や守護勢力、現地の国人らに、公家や寺社の荘園が侵入を受ける事が頻繁に起こる時代であった。

万里小路家も例外ではなく、家領のうち、年貢収入が実際に見込める所は少なかった。嘉吉三年（一四四三）三月一日条には「家領内多在西国、然去々年以来、守護違乱未休、去々年以来相待餓死之間」とあり、去々年、即ち嘉吉元年（一四四二）の嘉吉の乱以降は、特に西国の家領が守護勢力の侵入にさらされた様子がうかがえる。「餓死」とはやや大げさかもしれないが、切迫した状況が伝わってくる。

時房は、『建内記』のなかで、公家として朝廷内外で活躍する記事がみられる一方、家領の直務安堵の御教書発給に苦勞し、金策に奔走する記事が度々みられる。公家とはいえ、決して安定した生活ではなかったのである。

## （二）浄蓮華院について

浄蓮華院は、正治元年（一一九九）、勸修寺流藤原氏の吉田経房によって建立された。藤原定家の『明月

記』（正治元年十二月廿四日条）には、建立時の様子を「堂上如花、門前成市」と記し、その繁盛ぶりを伝えている。経房は翌年死去し、同院に葬られ、墳墓が築かれた。以後、同院は経房子孫の共同墓地としての役割をもつ氏寺となった。

浄蓮華院については、『勸修寺家文書』に収める「遺言条々」<sup>10)</sup>に記述がみられる。「遺言条々」は鎌倉時代の勸修寺流藤原氏当主達の遺言状や処分状、讓状等を載せている。同院については、例えば、正治二年（一二〇〇）二月廿八日付「勸修寺経房処分状」<sup>11)</sup>には、

（略）抑、云賀茂経藏、云浄蓮華院、次第附屬者、情見傍例、定有若亡歟、子孫之中雖称予子孫、非尼上子孫者、不可入此中、以継家風者、可為長者、縱雖位高、不歴可歴之頭要、自閑官纔加爵級、於上臈輩者、不可用、世之所許、天之所授、定無陰歟、（略）（傍点筆者）

とある。健治二年（一二七六）十月十七日付「勸修寺経俊処分状」<sup>12)</sup>の中には、

（略）一向所讓与俊定也、但於浄蓮華院者、経頭要為家長者之人、可管領之由、被載故大納言殿御

契状了、仍故黃門他界之時、被示付愚臣之間、加修理、所管領也、然而就家之長者、可有沙汰、於文書者、故黃門分經藤入道遁世之時、皆以成灰燼了、入道殿讓賜予之、記録雜文書以下并予之時文書等、悉以所讓与也(略) (傍点筆者)

と言及されている。要約すれば、同院は、しかるべき血筋を持ち、弁官・藏人の職を経る「家風」を継ぐ最上首の者、長者が管領すべき寺院であつたという。「遺言条々」からは、同院は共同墓地を有する持仏堂程度の氏寺であつた可能性が高く、同氏長者が、独占的に管理していた氏寺であつた。

時代が下ると、同院は次第に寺院としての体裁を整えていった。寺領も持つようになり、例えば、備後国地毘莊河北<sup>13</sup>(鎌倉時代後期)、近江国湯次莊の一部(南北朝時代初期)が確認できる。やがて、同院は勅願寺となり、応永三十年(一四三三)には幕府の祈禱所とされ、勸修寺流藤原氏の枠を超えた一個の寺院としても存立することになった。

時房の時代、同院は、浄土宗系寺院で、長老として智林と寥悟が寺務を取り仕切っていた。ほかに、使者

として行動が多い良田、金融業を営む尊悟<sup>16</sup>そして賢如、教悟などがいたことが『建内記』から確認できる。特に金融活動を行っていたことは、当時の経済・金融の主役が寺社や僧侶、法体をもつ者たちであつたことの好例である。

万里小路家に対して同院は、祖先や親族の供養や祭祀を行ったり、祈禱や読経(主に仁王經)などの仏事が結願した証明である巻数を、同家に送っていることがたびたびみられる。

時房は、月忌の供養も熱心に行っていたため、日記には遠忌・正忌・月忌の供養の記事が多くみられる。供養の際は、時房の自邸内にて行う場合と、氏寺にて行う場合があるが、自邸内の場合にも浄蓮華院の僧侶を招いて行うことがあつた。例えば、正長元年(一四二八)五月四日条には、

四日、卯、天晴、

先妣御忌日也、囑請浄蓮華院長老寥悟上人、良円房・教悟喝食、修仏事・祭典、点心・齋食如例、施物追可沙汰送之、(略)

とあり、先妣(亡母)の月忌に浄蓮華院の僧侶らを招

き、供養を行っている。なお『建内記』では、月忌の供養・仏事の記事は毎月あるので、省略されることも多い。その場合は「御霊供（御仏供）等如例」「寺院等存例歟」「寺々又存例歟」「如毎月」などと簡略に記される。この場合の「寺」は氏寺の浄花院・浄蓮華院を主に指している。

また、遠忌や正忌の場合、時房は同院の墓地に墓があると、墓参りに訪れることがあった。例えば、文安四年（一四四七）十月十八日条、宣房の遠忌では、

十八日、丁丑、（略）

故一位殿御遠忌也、作善料兼施入浄蓮華院、御影同奉渡之、今日蓬屋御牌前御霊供如例、次参詣河東御石塔、（略）

蓬屋（自邸）において供養を行い、次に河東（浄蓮華院）にも墓参りに向かっていることがわかる。

浄蓮華院は、万里小路家に対し、同家の墓も含めた共同墓地を管理し、供養や祭祀、各仏事を日頃から行う氏寺であった。これが同院の基本的な性格であり、役割であつたとみることができる。

以上、万里小路家と氏寺の浄蓮華院について少しく概観をした。次いで、『建内記』にみる浄蓮華院の良円の行動を糸口として、浄蓮華院のその他の役割を明らかにしてみよう。

## 二、浄蓮華院と万里小路家々領経営

浄蓮華院の良円が万里小路時房と浄蓮華院を盛に行き来している記述が、『建内記』には多く確認できる。

良円の名前のみられる記事を拾い、編年で一覧とすると、「表一」のようになった。良円は、時房のもとへやって来ることが多く記載される。詳細は記されない場合もあり、行動内容が不明な場合も少なくないが、内容の判明する記事を分類すると、ほぼ左のようになる。

- ・ 供養や仏事。
- ・ 点心や茶礼。
- ・ 物品の受渡しや贈答。
- ・ 家領経営に関する報告や相談。

『建内記』にみられる良門の記事			
巻	ページ	年月日	内容
1	35	正長1年1月8日	贈答
	63	2月4日	仏事
	65	2月12日	来談
	70	2月25日	来談
	120	5月4日	仏事
	162	5月27日	贈答
	176	6月2日	仏事
	179	6月4日	仏事
	198	6月19日	仏事
	53	永享1年7月4日	仏事
2	74	7月13日	仏事
	78	7月20日	仏事
	102	永享2年2月4日	仏事
	241	永享3年12月17日	紙背●書状
	304	永享11年2月20日	来談
	305	2月21日	三田村郷の事
	309	2月25日	仏事
	349	6月8日	贈答
	357	6月19日	贈答
	358	6月20日	来談
	365	6月27日	贈答
	369	6月29日	来談
3	33	永享12年小2月1日	贈答
	46	2月28日	三田村郷の事
	49	3月6日	贈答
	55	3月13日	来談
	112	嘉吉1年3月20日	来談
	120	3月24日	六師荘の事
	143	2年卯月5日	紙背●書状
	144	2年卯月3日	紙背●書状
	146	嘉吉1年4月1日	贈答
	148	4月2日	六師荘の事
	149	4月4日	仏事
	154	4月9日	来談・六師荘及び参宮の事
	156	4月11日	来談
	160	4月15日	仏事
	161	4月16日	来談
	172	4月23日	来談
	182	卯月9日	紙背●書状・智林、六師荘の事
	194	5月1日	贈答・三田村郷の事
	200	5月7日	来談
	203	5月10日	吉川荘の事
	208	5月20日	仏事・吉川荘の事
	214	5月27日	贈答
	234	6月12日	贈答・三田村郷の事
	235	6月15日	来談・逗留
	237	6月16日	来談・点心と逗留
	279	7月13日	良門房某處にて休息、茶礼を受ける
	286	7月20日	可賀荘の事
	309	2年12月12日	紙背●書状
	311	2年2月2日	紙背●書状・三田村郷の事
	318	2年6月27日	紙背●書状・三田村郷の事
4	5	8月3日	来談
	55	8月6日	紙背●書状・事情が点心に招引
	102	卯9月4日	来談・松明房と同道
	121	卯9月14日	来談・御厨子所率分代官の事
	218	11月16日	来談・贈答・五辻領茂家分代官の事
	29	12月22日	来談・五辻領茂家分代官の事
	52	12月20日	紙背●書状・智林、時房の招引断る
	58	嘉吉2年4月4日	仏事
	70	4月11日	来談・御厨子所率分の事
	107	嘉吉3年1月20日	贈答・正月の祝い
5	109	1月23日	使者・時房の参賀を約束
	212	3月18日	来談・御厨子所率分代官の事
	217	3月21日	来談・御厨子所率分代官の事(丹波口)
	21	5月16日	来談・家司の故国継満領の事
	79	6月14日	御厨子所率分代官の事(大和口)
	100	6月26日	御厨子所率分代官の事(大和口)
	133	7月4日	御厨子所率分代官の事(東国口)
6	138	7月6日	来談
	158	7月19日	(廣康時和の)使者・故国継宅相続の事
	207	文安1年1月20日	来談
	219	1月26日	使者・贈答・参賀の礼
	85	5月9日	来談
	215	文安4年1月26日	来談
	277	2月28日	時房の夢の中に登場
	167	6月1日	贈答(織物)
	189	6月11日	来談
	159	9月9日	紙背●書状・年貢催促(三田時敬宛)
10	123	12月3日	来談

※「巻」とは『大日本古記録・建内記』(全十巻)の巻数。

※「ページ」とは『建内記』各巻のページ番号。

この中で、家領経営（莊園経営）に関する相談や報告に注目したい。普通に考えれば家領経営は氏寺の關係するところではないだろう。供養や祭祀、仏事が宗教的役割ならば、年貢収入を目的とする家領経営は、明らかに世俗的な役割であるからである。良田の行動をみると、万里小路家の家領経営に浄蓮華院が深く関与していることがわかる。

具体的には、①請負代官の選定、②京と家領間の中継、③家領の代官職請負、である。以下、それぞれをみていこう。

## （一）請負代官の選定

「請負代官の選定」とは、家領の年貢徴収を請負う代官（請負代官）の候補を搜し、時房に推薦及び事実上の決定をすることである。

嘉吉元年（一四四一）四月九日条に、

九日、乙亥、雨、（略）六師事申承浄蓮花院、彦三郎可代官事也、良田房両度入来、五辻参宮来十六日可進發云々、人夫事申御室了、

同家々領の尾張国六師莊について浄蓮華院が担当す

ることになった、とある。後半部分に「良田房両度入来」とあることから、「六師事」を伝えたのは同じく良田であったと考えられる。「六師事」とは、六師莊の代官職である。早速、同院は彦三郎という人物を代官候補に推薦している。家領の代官の選定に関して、同家より同院が一任されることがあったのである。また、他の家領での同様の例として、嘉吉元年（一四四一）七月廿日条に、

廿日、甲寅、天晴、（略）良田房入来、可真郷代官事示片岡許、何様追可談合之、（略）

良田房が時房のもとにやって来て、備前国可真郷の代官職については片岡（幕府奉行人の飯尾氏の被官であった）に示す、つまり片岡と交渉すると伝えている。良田が伝えていることから、ここでも、同院が代官職の選定に関与していたことがわかる。ちなみに同年九月廿七日条には、片岡に正式に代官が補任されている。可真郷や六師莊のほか、禁裏御厨子所率分関（京郊外に設置の関所）<sup>⑦</sup>、播磨国吉川上荘などにも代官の選定に関与がみられる。

代官の正式な決定には、同家が出す補任状が不可欠



である。よつて、代官の決定権は当然、同家当主の時房にあるが、場合によつては事実上の代官補任を氏寺たる浄蓮華院が行つていたことも考えられる。

## (二) 京と家領間の中継

「京と家領間の中継」は、現地（家領）からの連絡（物資）を氏寺である浄蓮華院が受け、在京の万里小路家（時房）へ伝えること、または同家からの命令や指示を現地に伝えることである。

現地からの連絡を同家に中継する例としては、近江国三田村郷に関する一連の記事に事例がみられる。三田村郷は、中西範續（中西入道明賢）が代官であつたが、永享十一年（一四三九）二月廿一日条に、

廿一日、亥、天晴、（略）良円房入来云、三田村下司職事、旧冬中西範續所望之間出補任了、而永代之文章猶望之、無分別之夷俗任雅意懇望、希代事也、（略）

とあり、中西が永代にわたつて代官職を保障する文言を求めている、ということが良円によつて伝えられている。現地との連絡の間に同院が入つてゐることがわ

かる。

永享十二年（一四四〇）二月廿八日条には三田村郷での事件について触れられている。

廿八日、丑、天晴、晩雨、良円房入来、三田村地下人田地押領無号上、事談合也、（略）

三田村郷地下人が、田地を押領するという事態が起つたという。これは良円が時房のもとに來たことによつて伝えられたのは確実であり、三田村郷においては、同院が現地からの連絡を受け、時房に伝える仕組みになつてゐたと考えられる。

また、嘉吉元年（一四四一）六月十二日条には「良円房入来、三田村中西範續送肴物、五種、」とあり、中西範續から時房に肴物が送られている。この記事には、おそらく同年七月記紙背文書内の断片である、

浄蓮華院 三田村中西

進上 良円御房 上範續

と関連があると考えられる。肴物の贈答にも浄蓮華院を中継してゐたのではないだろうか。嘉吉三年（一四四三）六月廿八日条には、中西範續より茶甘袋が送られている。この贈物が、中西から直接時房に送られた

可能性も否定できない。だが、贈答の記述のすぐ前に、先の例と同様、やはり良田が来たこととあることから、同院が中継して良田が持参したと考えた方が自然だろう。

同院は、現地と同家を結ぶ中継役としての役割を担うことがあったのである。

### (三) 家領の代官職請負

「家領の代官職請負」は、浄蓮華院自体が、万里小路家の家領の代官を請負うこと、つまり同院が直接の代官となることである。

同家は、莊園や公領と並び、禁裏御厨子所率分関の一部の得分権を有していた。同家は複数の代官を補任しているが、その中に同院への補任がみられるのである。嘉吉元年（一四四二）閏九月十四日条には、

十四日、丁丑、天晴、

良田房入来、御厨子所率分今道々下口事、代官職可仰付浄蓮花院之由、以彼上人示長老者也、御教書奉行未書上之、殊近日可然云々、内々入魂了、翌日長老返答被謝之、(略)

とあり、今路道下口（北白川）の代官職を同院に補任することについて、時房がそれを認め、良田を通じ同院長老に伝えさせている。おそらく同院は代官職の補任を打診していたのだろう。この補任に関して、嘉吉元年（一四四二）十一月廿七日条には、

廿七日、丑、天晴、(略) 浄蓮華院長老来臨、

御厨子所率分内壺所、川北、為修理料寄進寺家事、

被謝之、寄進状以吉曜可□□□、

として、代官職補任が、修理料を下行（主に供養や仏事の費用として金銭を与えること）するかわりであったことがわかる。当時、同家の経済状況は苦しく、直接に金銭を渡すことが困難だったのである。そこで代官職を直接預け、得分をそのまま同院への「寄進」とした。土地や金銭等の寄進が普通なだけに、代官職の寄進は注目できる。氏寺が寄進という名目で、檀那の家領代官を直接預かることがあったのである。この点に関連して、新田英治は、土倉等の貸金の債権者が代官職を預かることで、債務回収を図る事例を同家の吉川上荘において明らかにしており、この寄進の例とメカニズムがよく似ている。<sup>(18)</sup>

同院にとつては、下行が望めなければ、供養や祭祀、仏事に支障がでる。ならば直接檀那の収入源を押えて、自ら回収しようという意図があったのではないだろうか。供養や仏事に熱心な時房にとつても、下行ができないのは心苦しく、同院への代官職補任を認めざるをえなかったのだらう。

以上、具体的には三つの点において、浄蓮華院は万里小路家の家領経営にも深く関与、いわば“介入”していたことを明らかにした。同院は、墓地管理や供養や祭祀、仏事を基本的な役割としつつ、家領経営の分野にも多大な役割を担っていたのである。

### おわりに

本論では、室町時代における万里小路家と浄蓮華院について取り上げ、氏寺たる同院が、家領経営にも関与する役割を持っていたことを明らかにしてきた。

浄蓮華院は、勤修寺流藤原氏及び万里小路家の共同墓地であると同時に、同家へは普段から供養や祭祀、仏事を行う氏寺であった。しかし、役割はそれだけとど

まらず、同家の家領経営にも深く関与がみられることがわかった。

氏寺は檀那からの十分な寄進や保護があれば、供養や仏事に専念するかもしれない。しかし、室町時代は、公家や寺社にとつて、莊園経営は困難な時代であった。頼りの莊園は、地頭や守護勢力、現地の国人らに侵出された。たとえ幕府御教書があつたとしても、年貢の確保は保障されない場合も多かつた。<sup>19)</sup>年貢の確保のみを任務とする請負代官が、社会に浸透したことは、莊園領主の切迫した状況をよくあらわしている。

氏寺にとつても、檀那の収入がなければ、当然寄進も保護もなくなるため、寺院運営が困難になる。檀那に依存の強い氏寺であればなおさらである。浄蓮華院の場合、「遺言条々」に見る如く、当初は、吉田経房の吉田亭の傍らに立てた堂宇がもとである。その後は長者が管領の持仏堂、せいぜい共同墓地を持つ程度の氏寺であつたと推測できる。だが、浄蓮華院は次第に一個の寺院としての体裁をもつに至つた。その時期は、遅くとも南北朝時代から室町時代初期であつたと考えられる。時房の時代までには、寺領を有し、複数の寺

僧がおり、金融活動も行う一寺院としても存立していたのである。

同院は檀那である万里小路家から、たびたび下行を受けていたが、同家々領の年貢でまかなわれることになっていたため、<sup>(20)</sup>下行が滞ることもあった。下行獲得の為に家領の経営に深く「介入」することになったのではないだろうか。

当時は禪宗をはじめとした寺社や僧侶が、活発な経済活動を行っていた。<sup>(21)</sup>土倉にも僧名を持つ法体の者が多かった。これは、広い意味での宗教的勢力が、莊園経営や金融業といった、経済・金融の分野に関する知識や能力に長けていたことをあらわしている。いわば宗教勢力の世俗化が急速に進んだといえるだろう。多分にもれず、浄蓮華院もこの分野の知識や能力に長けていたのではないだろうか。代官職の請負、尊悟の金融業にも、その一端があらわれている。

少なくとも万里小路家にとっては、信仰面で繋がりが強く、信頼でき、経済や金融の分野でも頼りになる心強い存在だったのである。先に「介入」と表現したが、同家の要請による面もあったと考えることができる。

る。いずれにせよ、同院の家領経営への関与は、同家と同院の双方の利益に直結するものであったと考えられる。

時代の流れの中で、同院は墓地管理及び供養・祭祀・仏事等を行う存在から変化し、世俗的な分野（ここでは家領経営）への役割も合わせて持つに至った。これは単に万里小路家の氏寺が変化したという意味だけでなく、古代の氏寺とは異なる、中世の氏寺の登場を意味する。もちろん、中世すべての氏寺が、多様な性格や役割を持っていたわけではないが、浄蓮華院のような氏寺の存在はもつと注目されるべきであろう。

本論では、万里小路家と浄蓮華院に焦点を絞ったが、同家の他の氏寺である浄花院や建聖院については全く触れることができなかった。中世後期における公家々政の実態を知る上でも、氏寺との関係は重要視されるべきである。同家と氏寺との関係のさらなる解明は、今後の課題としたい。

無論、万里小路家の事例だけでなく、広く中世の檀那と氏寺の関係を明らかにすることが、中世氏寺の全体像の構築に必要である。

- (1) 『国史大辞典』（吉川弘文館、一九八〇年）「うじでら」（田村圓澄が担当）の項「（略）奈良県桜井市の山田寺と蘇我倉山田石川麻呂一族、同じく御所市の軽寺と大輕氏との関係が示すように、飛鳥時代の寺は、氏族の本拠の地に建てられる場合が多く、また氏族の古墳と寺と本拠の三者の緊密な関係が指摘される。（略）」とあり、また『日本歴史大辞典』（河出書房、一九八五年）「うじでら」（竹内理三が担当）の項には「（略）古くは蘇我氏の向原寺・山田氏の山田寺・中臣氏の中臣寺・紀氏の紀寺があり、（略）」とある。どちらも氏寺の最も古い例を古代飛鳥時代に求めている。
- (2) 服藤早苗『家成立史の研究』（校倉書房、一九九一年）。
- (3) 島田暁「氏寺考」（『愛泉女子短期大学紀要』十、一九七五年）では、古代の氏寺と奈良時代以降のそれとは、建立の経緯がかなり違うことから、「氏寺」の語を奈良時代以降は使用すべきではない、と主張している。
- (4) 先行研究の整理と参考文献の紹介を若干行っておく。  
勸修寺流藤原氏及び万里小路家の研究では、平安時代を対象としているが、橋本義彦「勸修寺流藤原氏の形成とその性格——古代末期中流貴族の典型として——」

（坂本太郎博士還暦記念会編『日本古代史論集』下、吉川弘文館、一九六二年、のち橋本義彦『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、一九七六年）があり、勸修寺流藤原氏の研究としては代表的な論文である。また中村直勝「勸修寺家領に就いて」（『中村直勝著作集』四、一九七八年、初出は一九四一年）では同家の中世の家領について、「勸修寺家文書」から明らかにしている。高群逸枝『平安鎌倉室町家族の研究』（国書刊行会、一九八五年）は勸修寺流と万里小路家について、家族制度の観点から言及している。また、新田英治「室町時代の公家領における代官請負に関する一考察」（『日本社会経済史研究』中世編、吉川弘文館、一九六七年）では、万里小路家を取り上げ、公家領での代官請負の実態について明らかにしている。万里小路時房の時代の万里小路家領についても整理している。しかし、氏寺が家領経営に積極的に関与していることに關しては言及されていない。高橋秀樹「中世貴族の祖先祭祀と祭祀空間——勸修寺流藤原氏万里小路時房を中心に——」（五味文彦編『中世の空間を読む』吉川弘文館、一九九五年）では、時房の祖先祭祀から、同家の家意識を明らかにしている。

氏寺の機能や役割に関するものとして、まとまったものを挙げるのは難しいが、京楽真帆子「平安時代の

「氏」と寺」（『日本史研究』三四六、一九九一年）は、平安時代の藤原氏門流の氏寺が、氏族の精神的韌帯として機能していた事を指摘した点で重要である。また、高橋前掲論文と、同「祖先祭祀に見る一門と「家」——勸修寺流藤原氏を例として——」（高橋秀樹『日本中世の家と親族』吉川弘文館、一九九六年）では、勸修寺流藤原氏の勸修寺や浄蓮華院等の氏寺や、自宅における祖先祭祀に注目し、「家」の意識や成立について明らかにしている。特に高橋は浄蓮華院について詳しく論じている。同院が「家」意識や成立に重要な意味と役割を果たしていたことを明らかにしているが、同院による家領経営への関与については言及がなく、同院の多様な役割については触れていない。

浄蓮華院については、高群前掲書と高群著書『招婿婚の研究』（講談社、一九五三年）に触れられるが、高橋前掲書に詳しい。他には、佐藤進一「浄蓮華院文書」（『年報中世史研究』一、一九七六年）、森茂暁「東洋文庫所蔵『浄蓮華院文書』と『宣胤卿記』」（『国書逸文研究』七、一九八一年）等がある。

浄花院については、浄土宗関係者によって、寺域や建立年代について研究の蓄積があるが、鈴木成正の一連の研究が本論と関係が深い。「浄華院の発展について——特に等瀬の活動を中心として——」（『三康文化研究所年

報』十八、一九八六年）、「浄華院の子院について」（『鴨台史学会「鴨台史論」一、一九八七年）、「建内記」に表れた浄華院の塔頭について」（『三康文化研究所年報』二十、一九八七年）、「浄華院の子院無量寿院について——「建内記」を中心として——」（『鴨台史学会「鴨台史論」二、一九八九年）等である。鈴木は浄花院の子院が、万里小路家の家政経済に対応する機能を持っていたことを明らかにしている。この点は、本論で触れている浄蓮華院の役割を、浄花院も同じように有していたことを明らかにしている。しかし、同じく氏寺であった浄蓮華院の役割については触れていない。また、なぜ浄花院がそのような役割を担ったのかについての考察は十分とはいえない。

請負代官と公家領の荘園経営については、万里小路家領を分析した新田前掲論文の他、中島圭一「中世京都に置ける土倉業の成立」（『史学雑誌』一〇一—三、一九九二年）では、土倉の請負代官について考察しており、万里小路家々領における土倉による代官の請負についても触れている。中島は、新田のように、浄蓮華院が同家の家政や家領に関与していることには触れているが、あくまで代官や金融業者としての立場からみており、氏寺としての積極的な関与を考察していない。永原慶二「荘園解体期における請負代官」（網野善

彦他編「講座日本莊園史・莊園の解体」吉川弘文館、一九九九年）では、代官請負制についての概説と、研究の整理がされている。また菅原正子の「中世公家の経済と文化」（吉川弘文館、一九九八年）では、公家である山科家の家領経営について詳しく研究しており、本論で取り上げた時代と同時期の山科家の家領経営についても言及し、請負代官が山科家でも用いられたことを明らかにしている。

(5) 橋本前掲論文によれば、弁官補任をみると、一〇一〇年―一八二二年の間、弁官は一〇六人、うち同氏からは二十一人。輩出数はトップであるという。

(6) 万里小路家の当主は、資通―宣房―季房―仲房―嗣房―時房―冬房―賢房…(略)である。

(7) 將軍家に、公家が家司として奉公したことは、百瀬今朝雄「將軍と廷臣」(『週刊朝日百科日本の歴史』中世Ⅱ⑥、朝日新聞社、一九八六年)等で指摘されている。

(8) 同時代の武家伝奏の研究には、瀬戸薫「室町期武家伝奏の補任について」(『日本歴史』五四三、一九八九年)がある。

(9) 新田前掲論文では、同家の家領が十三ヶ国二十四ヶ所に及ぶことを明らかにしている。山城国、近江国、及び西国に過半数が集中しており、国衙領もいくつかみられることが特徴である。

(10) 中村前掲論文「勸修寺家の家領に就いて」にて初めて翻刻されている。「鎌倉遺文」にも各文書が収められる。

(11) 「鎌倉遺文」二九〇六七。

(12) 「鎌倉遺文」三〇四四六。

(13) 服部英雄「景観にさぐる中世」(新人物往来社、一九九五年)、同「地毘荘」(『講座日本莊園史』9、中国地方の莊園、吉川弘文館、一九九九年)、に詳しい。

(14) 「浄蓮華院及永明院関係文書」(下郷傳平氏所蔵文書内)。

(15) 註(14)に同じ。

(16) 嘉吉元年(一四四一)九月七日条に、土一揆蜂起によって、土民らに借書破棄を迫られ、やむなく破棄した記事がある。新田前掲論文にて触れられている。

(17) 率分関については、相田二郎『日本の関所』(有峰書店、一九七二年)や、河内将秀『中世京都の民衆と社会』(思文閣出版、二〇〇〇年)等がある。

(18) 新田前掲論文。この点に関して、中島圭一は、土倉の代官請負は、貸金の債権回収とは直接関係がないことを主張する(中島前掲論文)。

(19) 御教書を発給させ、守護に遵行を求めても、結果として遵行を拒否されたり、御教書自体を奪われてしまうこともあった。例えば、嘉吉元年十月五日条には「御教書正文抑留之」とあり、現地に派遣した使者が御教書を守護方に奪われている。

(20) 毎月三度の読経の費用として、尾張国六師莊年貢の一部が充てられていた。嘉吉三年（一四四三）五月十五日条等。

(21) 特に禅宗の活動が活発であったことは有名である。藤岡大拙「禅院内に於ける東班衆に就いて―特に室町幕府の財政と関連して―」（『日本歴史』一四五、一九六〇年）等。

(22) 「日吉社並叡山行幸記」（『群書類従』卷三八）・「日吉社叡山行幸記」（岡見正雄博士還暦記念刊行会編『室町ごろ』角川書店、一九七八年）から、正和年間（一三二二―一三二六）の土倉三三五軒のうち、二八〇軒が山門（比叡山）関係であったことは既に諸氏によって引用、紹介されている。室町時代も土倉の多くが山門関係の者であったと考えられる。山門関係、禅宗僧侶、その他の法体の者をあわせれば、金融業の大多数が僧侶や法体を持つ者であったことが推測できる。なお、土倉に関しては、中島前掲論文の他に、小野晃嗣「室町幕府の酒屋統制」（『史学雑誌』四三―七、一九三二年、のち小野晃嗣『日本産業発達史の研究』至文堂、一九四一年）、奥野高広「室町時代に於ける土倉の研究」（『史学雑誌』四四―三、一九三三年）、桑山浩然「室町幕府経済機構の一考察―納銭方・公方御倉の機能と成立―」（『史学雑誌』七三―九、一九六四年）、下坂守

「中世土倉論」（日本史研究会史料研究部会編『中世日本の歴史像』創元社、一九七八年）等がある。

※ 本論執筆に際し、史料の検索には東京大学史料編纂所データベース、論文の検索には国立情報学研究所の検索システム（Cenl）の恩恵に預かった。